



児童文化を支えた詩人

佐伯 郁郎

奥州市江刺区米里の中心地である人首町は、およそ四百年も前につくられた小さな城下町であり、昔は、海岸と内陸との交通の宿場町として栄えた。自然に囲まれた静かな山里であるが、歴史が深く伝統や風習をたくさん残しているところである。

佐伯郁郎は、一九〇一年（明治三四年）、この旧江刺郡米里村人首に生まれ、本名は慎一といった。

幼いころの慎一は、昔話に興味を持ち、米里が発祥地とされる「ひよっとこの話」や「人首丸伝説」など真剣に聞き入っていたと言われている。また、もうひとつ慎一に影響を与えたものに、人首に早くから布教されていたキリスト教がある。昔話のような古いものと、キリスト教のように新しいものへのあこがれを同時に受け止められる感性豊かな少年時代を過ごしていた。

一九二〇年（大正九年）、一九歳の慎一は、旧制盛岡中学校（現・県立盛岡第一高等学校）を卒業して上京し、早稲田大学文学部フラ

ンス文学科に入学した。もともと詩心があった慎一だったが、このころから意識的に詩を書くことと思い、筆名を「佐伯郁郎」として作品を発表した。

一九三一年（昭和六年）には、詩人としての最初の詩集「北の貌」を出した。このことがきっかけとなって、草野心平、村野四郎など、同世代の詩人たちと知り合うことができた。その後も、郁郎は詩作を続け、五冊の詩集を発行することとなった。

詩を作る一方で、郁郎は農民文学にも関心をもち、地方文化の見直しを求めて、芸術や文学に新しいものを取り入れようとした。一九三四年（昭和九年）三十三歳の郁郎は、北原白秋や萩原朔太郎たちと「胡桃の会」を作り、幹事役として働いた。

一九三七年（昭和十二年）におきた「日中戦争」前後の日本は、急激に軍国主義が広がり軍部が国家を支配し、国民の思想や行動を統制するようになった。その結果、文化的な面も低下し、子ども向けの図書や児童の読み物がどんどん低俗化していった。

当時、内務省の図書課に勤めていた郁郎は、「何とか子ども達に芸術的にも娯楽的にも質の高い図書を与えなければならぬ。」と思い、百田宗治、山本有三、小川未明、坪田譲治たちに呼びかけて新しい児童文化運動を展開した。一九四〇年（昭和十五年）に第一

回児童文化賞が設けられたのも、郁郎の情熱と活躍によるものである。

終戦の翌年の一九四六年（昭和二十一年）四月、郁郎は、地方事務官として岩手県庁に転任し、県の児童課長を勤めた。その後、一九五四年（昭和二十九年）からは、岩手大学学生部の厚生課長になり、積極的に学生の世話をした。また、岩手県詩人クラブを結成して、自ら初代会長を務めたりもした。

当時の郁郎は、県内の小学校・中学校・高等学校の校歌もたくさん作っている。奥州市内の学校では、江刺区おおたしろの太田代いいで、稲瀬いなせ、梁川やながわ、広瀬の各小学校や、田原たわら、伊手、米里、梁川、広瀬の各中学校（田原中学校以外は現在は統合している）である。また、北上市にある専修大学北上高等学校の校歌も、郁郎が作ったものである。

この年（昭和二十九年）の八月、郁郎の故郷である人首には、小川未明の詩碑が建てられた。当時の米里村長は、郁郎の兄の信であったが、町村合併によって「米里村」という村名がなくなることを残念に思い、何か記念に残るものはないものかと考えていた。それを聞いた郁郎は、米里の教育の発展を願い、健全な子どもを育てるための環境づくりの一つとして、小川未明の碑を建てることを提案したのであった。

小川未明は、かつて児童文化運動等で一緒に活動した仲間であり、大学時代の先輩でもあったので、郁郎は、「きっとところよく引き受けてくれるだろう。」と思っていた。ところが、未明からきた返事は「米里という土地はまったく未知であり、イメージがわからないので詩文は書けない。」というものであった。これに対し郁郎は、自分を育ててくれた故郷や未来ある子ども達のために何かを残したいという思いで「あなたは郷里の子ども達のためだけに童話を書いているのか。日本全国の子ども達のために書いているはず。そうであるなら、わたしの郷里きょうりの子どもらのために何も書けないというのはおかしい。」と説得したと言われている。

郁郎の思いが通じ、小川未明から届いたのは、次のような詩であった。

いかなる烈風れつふうも

若木を折る力なし

伸びれ子供等こどもらよ

地元の人々はこの詩を石に刻み、「教訓碑きょうくんひ」として、旧米里中学校の校庭に建てたのであった。

岩手にもどり、地方文化の向上を目指した郁郎は、一九九二年（平成四年）大腸がんのため、九一歳でその生涯を閉じた。

*佐伯郁郎についてもっと知りたいことがある人は、米里の生家に蔵を改造した「佐伯郁郎資料室」が設けられているので、訪ねてみてください。

(問い合わせ 三八―二一三七 佐伯公郎様方)

*参考文献

「郷土の発展に尽くした 胆沢・江刺の先人物語」

胆沢・江刺の先人物語の会

